［第十九話］

双葉山　定次

不世出（めったに世に現れないほどすぐれている）の名横綱といわれた双葉山は、明治四十五年大分県に生まれました。六歳のとき、友だちと遊んでいて吹き矢が当たり、右の目が見えなくなります。また少年時代、父の手伝いをしていた舟の作業で、右手の小指もつぶしています。この二つのハンディキャップを持ちながら、六十九連勝の偉業をなしとげたのです。

乃木希典大将も子どものころ左目の視力を失いました。小泉八雲（ラフカディオハーン）も片目が見えませんでしたが、たくさんの日本を愛する著書をのこした作家です。全盲の塙保己一をはじめ、昔から障害を克服した努力の人はいろいろありますが、とくに双葉山の場合は力士ですから驚きます。

双葉山の強さ、仕切りの美しさについて、アナウンサーだった山本照という人

が「土俵に上がったらむだな動きをしなかった。かならず受けて立つ相撲も、目が悪かったから、自分からつっかけるのを不利と考えた。やはり大したものだ」と言っています。

また当時、実力派の人気力士だった五ツ島と笠置山はそれぞれ「一生懸命組んでいると、途中で、どうしたんだろう、いなくなっちゃったんじゃないか、と思うことがある」「双葉関の土俵人格は神に近かった。双葉関は無になっているから、こちらの闘志が吸い込まれてしまう。十七回合って一度も勝てなかった」と語っています。五ツ島には、双葉山が空気のように感じられたのです。

大関になって間もないころ、双葉山は安岡正篤先生（第二十話参照）から、木鶏の話を聞きます。古典の「荘子」や「列子」に出ている寓話（教訓や風刺をおりこんだたとえ話）で、ほんとうに強い闘鶏は、からいばりもしないし、むやみに戦闘的でもなく、ちょっと見たところ木鶏（木で作った鶏）のようである。そうなれば徳が充実し、勝敗も超越して、天下無敵となるというのです。

昭和十四年一月十四日、双葉山は安芸ノ海に敗れ、六十九連勝でストップしました。双葉山の電報が、インド洋上にあった欧州航路の船中の安岡先生に届きます。「ワレ、イマダ、モッケイ、タリエズ・フタバ」――**私はまだ先生から教えられた木鶏のような境地にはなれませんでした**、という意味でしょう。安岡先生は電報を持ってきたボーイに向かって「双葉が負けたよ」と言われました。

双葉山は、そののち福岡県筑紫郡山中の滝にうたれて修行、復帰して再び連勝をかさねたこともありましたが、昭和二十年の敗戦に大きな衝撃を受け、引退を決意します。

昭和三十五年、相撲協会理事長となり、相撲界の改革にあたりました。親方となってからの名は時津風定次であります。時津風部屋は、彼一代で一横綱・三大関を育て、幕内が二十六名、関取の合計は四十八名という盛況でした。

名選手かならずしも名監督ならずと申しますが、双葉山は自分が名力士であっただけでなく、名親方・名理事長でありました。一度負けた相手には、二度と負

けることがなく、ハンディキャップを乗り越え、稽古（けいこ）と研究、精神の修養を続けた人だったのです。

昭和四十三年（一九六八）五十六歳没

○　六十九連勝の偉業は知っていましたが、右の目が見えなかったとは驚きです。

○　「ワレ、イマダ、モッケイ、タリエズ」は電報の代表的なものですね。

○　安岡正篤先生に学んだ横綱は心、技、体が完璧となり、土俵人格が神に近かったとはうなずけます。

（M生）